



太平洋戦争中、国民はどんなくらしをしていたの



言いたい事も言えず、戦場や工場へ行かされたり、
物資・食料の不足で苦しんだりしたんだよ。

思想統制が、ますますきびしくなった

日中戦争が始まってから、思想・言論への弾圧が、ますますきびしくなり、政府や軍を批判した人は、「特高」とよばれる特別高等警察に逮捕されました。国民は隣組や五人組に入れられて、国債や金属回収の割り当て、兵士になる人の歓送、遺骨の出迎え、勤労奉仕、防空演習などが義務づけられました。これらをなまけた人は、「非国民」と非難されたのです。

男子は戦場へ、女子は工場へ行かされた

当時は、一定年令に達した成年男子を、国が強制的に兵隊にできる、徴兵制の時代でした。初めは20～40才でしたが、戦争が長引くにつれて、兵士が足りなくなつたため、19～45才に広がりました。また、14、5才以上の未成年男子に対して、海軍少年兵や海軍練習兵の募集が行われました。25才未満の未婚女子は、女子勤労挺身隊に入れられて、工場で働かされました。大学や高等専門学校の学生も、兵士にさせられました（学徒出陣）。

物資・食料の不足で苦しんだ

政府は、鉄・石油・もめん・羊毛・木材などの物資を、軍備に優先して使ったので、国民のくらしに必要な物資の不足は、どんどんひどくなっていきました。特に鉄などの金属が必要とされ、お寺のかねなどの鉄製品、銅像なども供出させられました。米・みそ・しょうゆ・塩・小麦粉・食用油・野菜・魚・肉・たまご・牛乳・乳製品・酒・木炭・マッチ・衣料などは、一定の割合で配る配給制や、一定の点数内で買えるきっぷ制になりました。

